

報 告 書

- 1 件 名 「木の香る空間デザイン検討会」(第1回)
- 2 日 時 平成24年2月3日(金)10時00分から11時50分まで
- 3 場 所 小田原市役所庁舎 4階 議会会議室
- 4 出席者 委員：後藤会長、牛山副会長、池村委員、杉本委員、高木委員(代理石田)
アドバイザー：平井アドバイザー、河合アドバイザー
小田原市 加藤市長、山崎経済部長、長谷川経済部副部長、永井経済部管理監
穂坂農政課長、相田係長、大島主事補
行政アドバイザー：鶴田都市計画課長、久保寺建築指導課長、松本建築課長
- 5 内 容 「木の香る空間デザイン検討会」の設置について
木のある空間作り、町づくりに向けた考え方

<概要>

- 出席者の紹介後、設立案、設置規約(案)、構成員(案)について説明した後、
全会一致により検討会の設立が承認された。
- 会長、副会長の選出について役員を選出について事務局一任の声を受けて役員(案)として
会長に工学院大学建築学部建築デザイン学科教授 後藤治氏
副会長に日本工学院専門学校クリエイターズカレッジ非常勤講師 牛山恵子氏を提案。
全会一致により役員(案)が承認された

～市長挨拶～

事務局：森林・林業・木材産業の全体像、モデル事業等の取組状況説明

会 長：今日は議題も細かく決まっていなくてフリートーカーの形式でやらせていただきたい。皆さんの活発な意見交換を期待する。

委 員：年間3000㎡の間伐をしているらしいが、木を出した所有者にお金がいけない。搬出するにしてもコストが高いので間伐をその場で捨てる事になってしまうのか。

事務局：そうである。間伐を必要とする森の所有者は、木材を出してお金をもらおうという意識がない。KEY TECでは8000～9000円/㎡で買い取ってくれる。小田原市では手入れ不足のため、A材はほとんどないというのが現状である。

アドバイザー

県では搬出に対して11000円/㎡の補助金を出している。これは全国で神奈川県だけがやっている補助金制度である。しかし搬出はなかなか行われぬ。これは県内の林業設備が遅れているため、搬出に対するコストが高くなってしまっているのが原因である。県としてもB、C材をどうにかしなければならぬと考えている。

委 員：奈良県の五條市ではB、C材をチップにしてボイラーに使用するという取組がある。普通は民家に使用することを考えているが、そこではお菓子工場の燃料として使用している。小田原も工場が多いので各工場にチップを燃料にしたボイラーを導入させるくらいの施策を立てるべきである。

人口減少によりチップを住宅に使用するというのも限界があるのは明白である。例えば市内の小中学校を全てチップ燃料のボイラーにするくらいの大胆な事をしていくべきではないか。

委 員：建築だけの視点で会議をするのは良くない。今の時代はコラボレーションが大事である。木材利用と何かをコラボレーションしてはどうか。例えば「家を木造にする」だけではなく、家を建てるにあたり木と何かをコラボさせるとか。木材利用と産業、観光あたりを結び付けなくては行けない。

委 員：間伐材をその場に捨てていたら、台風が来たときに危ないと思う。

事務局：転がらないように杭を打ち、きれいに積んでいる。しかし土砂崩れなどが起きたときは確かに危険である。

会 長：昔は木材利用の第一位は土留めであった。しかし今ではあまり利用されなくなった。それが間伐材搬出を遅らせる原因かもしれない。

委 員：土木工事にはどんどん木材を利用しなければならない。法令で定めてはどうか。

事務局：国では、治山・土木工事には支障のない限り木材を使うよう始動している。しかし

幸いな事に小田原では大きな災害がなく、そうした機会は少ない。

委員： 捨てている間伐材を利用することを考えなければいけないという事実を市民にも伝えなくてはならない。今は鳥獣害被害が多いのだから、柵などに利用すれば良い。

市長： 捨てている間伐材の供給サイドもちろん考えなければいけないが、使い手側の方も考えなければならない。また小田原を「木づかいのメッカ」にしたいと考えている。

人間が生まれてから生涯を終えるまでに多くの木に触れる機会がある。是非小田原市がそうしたライフスタイルの中で、市民に木とふれあえる様な機会を提供できるチャンスも議論して欲しい。そうして意見のあったものの中から事業化できそうなものやっけていきたい。先程も述べたが、「木づかいなら小田原」と言われるようになりたいし、そのためのセンターも作らなければならないと考えている。

先日東京の「木材を利用したおもちゃ美術館」に行ってきた。いろいろな方のお話を聞き、その中で「小田原でも木材加工の技術があるのだからできるのではないか。」という意見を伺った。私自身もそのように感じているので、小田原でもこのような取組を是非行いたいと考えている。

委員： 今動いている事業にターゲットを30代の子育て世代にしたものがある。木のおもちゃを「母親が子供のためにつくってあげる」といったスタイルである。親に作ってもらったということで木のおもちゃは子供の宝物になる。小田原に来て小田原の木材で自分の子供におもちゃを作ってあげるという動きができれば、おもしろいと思う。

委員： 今の時代はみんながクリエイターという時代である。完成品が欲しいのではなく、プロの人にフォローをしてもらいながら自作したいという意見が多い。今の杉本委員の意見は時代に合っているのではないか。木を使って「褒められて」初めて消費者の意欲は向上するものである。

アドバイザー

自分は小田原で何かをやる時は、木材を利用する事を第一に考えている。清閑亭の事業でいつも悩むのは「マクロとミクロをどうやって繋げていくか」である。木材利用のスタート（供給）とゴール（利用）を繋げる絵を描いていきたい。

小田原の国際通りにある古い酒屋さんでは木とお客さんを繋げるための動きをしている。シャッター通りではあるが、家具屋など木材を利用する店が多い。そのうちの軒をお母さんのたまり場として木を利用した空間作りを計画している。

今は行政から褒められても市民は喜ばない。市民同士が良いと認めるものでなければ、口コミで広がる様なものでなければダメである。

アドバイザー

市民が木を利用することを楽しむ町づくりが必要である。小田原駅はどこにでもあるような駅であると感じている。今は木片や木屑をリグニン（木材の3大主成分の一つ）で固める技術がある。燃やすだけでなく、その前に市民に魅せる事も重要である。駅全部では無いにしろ、一部を木造化できれば良い。長野では駅の中の歩道が木造化されていて趣がある。

委員： 私も商店街の歩道などを木造にしたらいいと思う。

委員： 今は木材のおもちゃなどに対する母親の認識が良くないと感じる。出来たばかりで綺麗なものは良いが、年数を経ると汚れてきて、子供が口に入れてしまう可能性を考えると怖いとの事だ。

今の30代くらいの方は木造の家に住んだことが無く、そのためこのような誤解をしているのだと考えられる。それは間違いなのだと指摘してあげる人が必要。

委員： 自分が所属する林青会では木育として月に1回小学校で木を使った授業を行っている。子供たちは木が好きみたいで自分が行くととても喜んでいて。また子供の頃から木に関して勉強することで木離れを防げると考えている。

副会長： 母親の視点だと完成した木製品にではなく、子供たちの木を見て目を輝かす姿にお金を払おうという気になる。観光地などで木を使ったイベントなどがあっても、木に対する知識だけを持ったインストラクターにお金を払おうとは思えない。木に対して「愛情」を持っていると感じた人と一緒にやりたい。軽井沢の「ピッキオ」では本当のプロたちがレジュメに沿って、愛情を持って木を使った活動に励んでいる。子供はもちろん自分も、安くない金額だが是非行きたいと思える。

木その物の値段ではなく「こんにちは」から「また来てね」までの体験に対してお金を払う。日常で出来ない経験をするということもとても重要である。

委員：まさにその通りである。21世紀は経験に対しての価値も考えるものだ。

委員：学生と接していても金属では自由が利かないし、木が一番使いやすいと言っている。木を魅せるホームセンターの案は素晴らしいと思う。

事務局：昨日林青会と一緒に大窪小学校で間伐材を利用したプランター作りを行った。決してきれいな形ではないが、子供達は皆喜んでやっていた。

アドバイザー

今の話は現代のライフスタイルのどこにでも当てはまるものである。それとは別に小田原独自のものを考えたら良いと思う。昔からの歴史があるはずの県西の森が何故今のよう状態になってしまったのか考えなくてはいけない。

お城の整備については、クスの木をどうするのかという問題がある。50～100年生の木をただ切るだけでは勿体無いと思う。天守閣木造化ならば、市民が「あの森から天守閣ができた」という認識を持てるのではないか。

アドバイザー

小田原と言えばみかんである。今はダンボールが主流だが、昔のみかん箱は木造であった。ダンボールだと密閉になってしまうのでみかんは腐りやすいが、木箱では隙間から空気が入るので腐りにくい。また木箱をバラして組み立てると本棚になるというのもおもしろいのではないか。

市長：昨日林青会ともそのような話になった。木箱はバリエーションもあるから良いと考えられる。

委員：間伐も大事だがコストがかかる。思い切って皆伐しなくてはならないのではないか。計画的にやれば皆伐は悪いことではない。私有林では難しいので、公有林でやっていけば良い。

市長：牛山委員が言われた根っこの気持ち。「木を使う事が大切」という気持ちを持って、様々な切り口でやってもらいたい。

委員：次からはカテゴリ別のテーマがあるといい。

アドバイザー

小田原では歴史まちづくりが始まっている。町並みを守っていくという理念で、職人をどのように育てていくかが問題となっている。「歴史的建築物」というのは間違った言葉であり、「歴史的建造物」という単語を使って欲しい。建造物なら川や石垣なども含まれるので。

会長：今回の議論をまとめると大きく5つになる。

- ① 未利用の木材の利用が重要である。
- ② 市のリーダーシップが重要である。
- ③ 木育の推進とそこにあるチャンスが重要である。
- ④ 一般の人が参加（体験）できる仕組みづくりと、それに対してはプロがサポートをしていくという事。
- ⑤ 森林のマネージメントをしていく。

個人的にはもっとユーザー側の視点を取り入れたいと感じた。木を使う人はいつも木の事を考えている訳ではない。興味の無い人も巻き込んでいけるような仕組みづくりをしていかなければならない。

また参加して作りたくなるような、シンボリックなものが必要である。そういうものがあって初めて市民は木を利用した活動に参加するだろう。さらに職人と市民とを近づけさせるアイデアも必要である。

事務局：これまでの議論を踏まえると、未利用間伐材も含めた森林からの供給と形態（良材、虫害材、端材など）に応じた木材利用のゴールがそれぞれにあるような気がする。次回では、そうしたサプライをそれぞれに対応したゴールの案をつくり、実際にどれが現実的に実現可能であり事業化できるかということに焦点をあてて議論できればと考えている。あらゆる幅の広い可能性を検討していければと思う。

事務局 次回、第2回は3月23日（金）16：00開始予定

以上